
魔砲少女リリカルなのは Gear of Night

天宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲少女リリカルなのは Gear of Night

【Nコード】

N7077X

【作者名】

天宮

【あらすじ】

八神はやての隣人で幼なじみ紅竜^{くじらまじつたつや}刀夜の物語。全く普通ではないこの少年がいかにか《運命》に立ち向かっていくのか？

魔法少女リリカルなのはとFateのクロスオーバーです。オリ主、転生者、最強もの、原作ブレイク、キャラ崩壊、ご都合主義、独自設定、ガールズラブ、テンプレ、ハーレムなどの要素を含みます。また、他作品の影響を多分に受けていますので、苦手な方、気に入

らない方はご遠慮くださいませ。

この作品は自分の処女作となりますので見苦しい点多々ござい
ますでしょうが生暖かく見守ってくださいることをお願いいたします。

あと、関西弁が間違っている可能性が高いので先に謝罪いたします

プロローグ - 大切な夢

夢を見た

はかない夢を

大切な人、たった一人の家族を失い、大切な人に気付いた時の夢。

母が死んだ。強くて凜として優しくかった唯一の肉親が……

電話を捨てて、玄関から飛び出した……

公園には人がない。後で聞いた話だと、そのころ外人の渋いオッサンの不審者が出没していたらしい。

ああ、僕は一人になったんだ。その景色を見て、俺はそう思った。そう思ってしまうと、涙があふれ、泣き出してしまった。

「刀夜くん、どないしたん？泣き出してしもうて。」

優しい声が聞こえてきた。振り向くと車いすの少女、八神はやてがすぐ近くにいた。

「母さんが死んだんだ、僕ももうひとりぼっちなんだ。」

皮肉にも、彼女の両親も先月なくなっていた。それをわかっていても僕は言っていた、言ってしまった。

はやては泣きそうになりながら

「刀夜君もひとりやあらへん。うちがいるやないか。刀夜君はうちの居場所でもあるんやろ？」

そういつて手を広げ微笑みかけた。

ああ、俺はひとりじゃないんだ。

そう思いながら、はやての胸に飛び込み、母との別離の悲しみの涙を流した。

五歳の時の大切な記憶。その一週間後が誕生日であった。

その時から、俺ははやてとともに生きていくことを決意した。

オリキャラ設定(前書き)

ネタバレなどを含むためお気をつけください。

オリキャラ設定

紅竜 刀夜 くりゅうとつや

C V 杉田智和

魔力ランク B

無印時 1 2 4

顔は二枚目半。体格は頼りがいがあるががちりはしていない、黒髪を荒く切っている。

八神家の隣に住んでいる。母は六歳の時に聖杯戦争に巻き込まれて戦死。普通の公立校に通っている。

変態という名の紳士。やることはちゃっかりやる。即断即決の怠け者。自分の正義に従う。はやてを深く愛している（恋愛ではなく親愛）。銀さんにかなり近い。

攻防ともに高い格闘性能を持つが、射撃や砲撃は苦手。砲撃は魔力を集めた剣をたたき込むという無茶技で代用し、射撃はアクセルシューターのみ。剣技に関しては高い才能を誇り、魔法なしならシグナムより強い。

スキル

解析魔術 A

道具や物体、魔術を解析する技能。

魔術 C

基本的な魔術（解析、再生、ルーン）などができる。

魔力放出

魔力を噴射して出力の足しにする技法。魔力量により威力が変わる

使用デバイス

デイルロス

デイルズオブディステニーのソーディアンの外見と能力。

アリシアの父親が前の持ち主。

オリキャラ設定（後書き）

話が進むにつれていろいろ追加させていただきます

第一話 無印開始（前書き）

ジエムシードーつ目封印までです。
キャラクター崩壊開始です。

ヒロインははやての予定です。

第一話 無印開始

- 懐かしい夢を見たな…

朝の日差しの中目を覚ます。時刻は6時過ぎ。

もうはやては起きてるかな？そう思い、ベットから起き上がり、リビングへ向かう。因みに、俺は八神家で生活している。二人とも親もいないし、一人暮らしもなんだから一緒に暮らしている。自宅は地下の工房ぐらいいしか使ってないし。

朝食を作っているはやてに声をかける。

「はやて、おはよう。」

「おはようさん。」

豆狸が挨拶を返す。

「豆狸言うな。」

「おい、なぜ平然と心を読む？」

「気にしたらあかん。というよりなあ、刀夜の考えてることやったらあらかたわかんぞ。」 はにかむようにはやては笑った。

「お前は俺のオカンか!？」

俺は顔を赤くしてはやての言葉に返す。はい、ツンデレとか言わない。まだ8歳ですから。

そして、二人で笑い出す。そんな朝の日常。

はやての作った朝食ができ二人で食卓をかこむ。因みに俺は料理は出来ない。食材の目利きは多少できるけど。

「そっついえばなあ。昨日変な夢みたんよ。なんか水橋ボイスで助けてっつて。」 「水橋ボイスって…」

はやてと俺はオタだ。まあ、細かいことは気にしないで。

「昨日か、なんか俺もそんな念話聞いたけど。」

「念話かあ。魔術関係者やるうか？」

「いや、魔導関係者だろ。不特定多数に対して助けを求めるなんて、魔術師はまずしないし。」

会話を交わす。因みに俺は魔導師でもあり魔術師でもある。まあ、どっちも半人前だがな。はやての治療に役立てばいいとおもい、魔術関係者に会わせたりしてるから、魔術も魔導もはやては知っている。

「魔術師だったら、畏の可能性が高いからな。ここは静観が正解だ。一応、オッサンにも報告しといたし。」

俺ははやてに告げた。ちなみにオッサンは俺の身元引受人かつ上司である。本名は確か月見総司だったか？二枚目のチャライやつだ。

「まあ、この件に関しては静観と言ったところか。」

結論づけて、食事を続ける。

「しかし、はやてもまた料理の腕あげたな。うまいよ。」

煮物もしっかり味がしみてるし、味噌汁のだしの風味も生きてる。

「ありがとう。」

「俺の方こそ、いつもおいしい飯ありがとう。」
お互いに感謝のことばを交わす。

そして他愛もない会話を交わした。

「ごちそうさま。んじゃ、学校行ってくる。今日は恭也さんとこ行ってから帰ってくるから、6時過ぎになると思う。」

「了解や。晩ご飯何か食べたいものある？」

「ふうむ……カツ丼」

「いいで」

「んじゃ、行ってくる。知らないやつや、知ってるオッサンについて行くなよ。」

そういい残して、俺は出発した。

「美由紀は少し離れてくれないか。」

恭也さんが美由紀さんに告げた。これから仕上げというところ

だ。

「シャルティエ」「ディムロス」「セットアップ」

俺と恭也さんが互いにアームドデバイスを構えた。俺がディムロス、恭也さんがシャルティエとタガーである。

恭也さんが距離を詰めてくる。俺は上段からそれを迎え撃つが、いかんせん小3と大1、その年齢差からくる体格差から弾き飛ばされる。そのまま距離をとり、

「轟魔人剣」

ディムロスから魔力波をとばす。約三メートルほどしか間合いはないが少しの牽制にはなる。ディムロスを下段に構え直し反撃に備える。

「そこだ！」

横から突進してくる恭也さんに

「虎牙……」

シャルティエをはじき上げ「破斬！」

上段を返すが

「甘いぞ」

左のタガーの一撃を腹に受け、二メートル程後方に飛ばされ着地、そして追撃。ディムロスをタガーに抑えられ、逆手に持ったシャルティエを喉元に突きつけられる。

「勝負あり！」

美由紀さんの声が響く。

「ふう、」

恭也さんが一息つき、剣を下げた。俺も一息ついてディムロスをしまった。

「やっぱり体重が足りないな。」

体重40キロないしな……つぶやいたら、なんか美由紀さんに睨まれた。なんか変なこと言ったかな？恭也さんは苦笑いしてたし。

「そういうのは女性の前では禁句だよ。」

そういつて、頭を軽くなでてきた。優しいお兄さんな雰囲気だ。

かなりのイケメンだし、噂によるとかなりもてるらしい。

「それはそうと、昨日おかしな念話がきたんだが」

「あの『助けてください』か？とりあえず静観することにしたが」

恭也さんも静観を選ぶか……まあ、忍さんの件で魔術と魔法を知ってるからな、理由は同じどころだろう。

「それにしても、詠唱なしで試合はきつくないか？」 恭也さ

んは訪ねてきたが

『……ファイアーボールぐらいしか使えんのでな。刀夜は剣技に特化しているからな。ショートカットでシャドーエッジやネガティブゲートを使える恭也には勝てんよ。』

俺のアームデバイスである。ソーディアン・ディムロスが答えた。

ソーディアンというのはデバイスのシリーズ名だ。通常のアームデバイスとちがいが人格が投影されてをり、使用者の先天資質に関わらず特殊な術式（詠唱を伴い魔力波等ではなく現象として発動する）を行使できる点が挙げられるらしい。らしいというのは特殊なものしか相手したことがないからだ。

そうなんだよなあ、恭也さん術式展開五倍速で魔力量が五十倍って張り合える気がしない。後数年すれば張り合えなくはないとは思うが、魔力が足りない。今は勝てないな。

『とはいえあそこまでの剣撃は評価できますね。体重、年齢を考慮すれば十二分に及第点といえます。』

「ありがとうシャル。」 今はまだ弱いことはわかっている。だから頑張れば強くなっていける。そう考えて練習を終えた。

『助けてください。』

念話が聞こえてきた。まあ、無視してギャルゲを続けよう。

『ブルアアアブルアアア』

電話か……携帯から若本の雄叫びが聞こえる。ディスプレイを

確認する。

「恭也さん？」

不思議に思いながらも電話をとる。

「ああ、もしもし？」

『刀夜か？少し頼みがあるんだが……なのはが念話の家から飛び出した。念話のすぐ後だから、多分それに関係あるんだろう。』

「わかりました。現在位置は？」

俺はギャルゲを停止して、席を立った。

「何だあ、あの魔力は？」

恭也さんと合流しようとして道を進むとかなりの魔力の奔流を感じ取る。恭也さん並の魔力はあるな？なのはか？

現場に着くと、改造制服のようなものを着たなのはが、魔法少女が持つには少しメカっぽい杖を持って、影を実体化して作られた十字架に張り付けられた化け物を封印していた。

これが後にPT事件と呼ばれ新たな伝説の始まりになるとは考えなかったが。何かが変わる、そんな気がした。

ってか改造制服風ってwww

第一話 無印開始（後書き）

まずははやてと恭也がキャラクター崩壊しました。

主人公は転生者でも最強でもありませんwwwまだ……

恭也の魔力量はAA。刀夜はCです。

更新は一日おきの午前三時の予定です。

次は29日にノシ

第二話 戦略会議（前書き）

少し短いかもしれませんがどうぞ。
少しキャラ崩壊してるかも。

第二話 戦略会議

「さてと、どういうことか説明してもらおうか。」

土郎さんは食卓の普段なのはの席の前の小動物に問いかけた。ちなみに俺は恭也さんと美由紀さんの席の間に立っている。

「はい……」

ユーノは説明した。

「……要約すれば、次元干渉を引き起こしうる願望器ロストロギア・ジエムシード、それも願いを歪んだ形でかなえるもの。そのかけら21個が事故により海鳴市に落ちてきた。それを発掘し、運搬してきた君が公的機関に頼らずに独自回収しようとしたけど、失敗。その後なのはに拾われ、今に至るといふことかい？」

土郎はどこか呆れながらもユーノに問いかけた。

「はい。」

「てめえ、馬鹿か！？地球の公的機関に頼らなかったことと、責任を取ろうとした点は誉めてやるけど、次元管理局に応援を頼むとか傭兵を雇うとか自分以上の力を持つものに頼ることは考えなかったのか？」

地球の公的機関としてはこの類のことは、聖堂教会か、魔術教会、さらにはアトラス院と言うところか。

聖堂教会の場合は次元世界、他世界からの干渉に関してはかなり厳しい。一応そういう類のことに対応する手段はあるだろうが、多分破壊する方向で話が進むだろう。

魔術協会の場合は、回収するだろうが、人材や用具デバイスを奪われた上にジエムシードを持って行くだろうな。情報隠匿のため口封じされそうだし。

アトラス院ならデバイスに関する技術提供で協力するだろうが、日本における影響力が足りないから依頼できないだろう。

「うちの一族は発掘調査を主にした種族で傭兵を雇うような余力は

ありません。実力的に僕が一番ましつてくらいです。管理局には通報はしましたが、正式なロストログア指定を受けていないジエムシードの捜査に回せる人員はいないと一蹴されました。」

ユーノは打ちひしがれていた。なんかorz状態だし。さすがに話せるだけあり、芸達者なようだ。だができることはしつかりやったみたいだ。

「さすがにかわいそうだよ。そんな強く言わない方がいいと思うよ。」

「そうなの」

美由紀さんとなのはがユーノをかばう。ほかのみんなも同じ意見のようだ。

「わりい。言い過ぎた。」

「大丈夫。気にしてないから。」

のほほんと返事が返ってきた。何というか器が大きいな。

「さてと、事情はあらかたわかったから、これからのことを話し合おう。」

土郎さんが微笑みを下げて真剣な表情になった。

「なら、俺はTTS（月村総合警備保障）のサイドとして意見させてもらうぞ。」

「どうしてなんも関係がないみんなが手伝っていただけなのですか？」

ユーノが驚いて聞き返してきた。

「ごうやって事情をなしてもらった以上、何らかの対応をしないといけないからね。」歪んだ願望器なんてものを放置していたら危険だ。なにが起こるかわかったものではないな。」 恭也さんと共に対応の必要性をいった。

「ユーノ君も困ってるんでしょ？だったら、私も助けたい。私にできることがあるなら。」

なのはも同意した。

「すみません……」

「ユーノ君ここはすみませんじゃなくて、ありがとうだよ。」

「なのはは軽くむくれながら告げた。」

「そうだね。ありがとうございます。」

「感謝するにはまだ早いぞ。これから身の振り方が決まるんだからね」

「士郎さんは告げた。」

「ジエムシードは基本的に封印でいいのかい？」

「はい。封印作業はレイジングハートを使えば可能です。」

「デイルロス、シャルは封印作業出来るか？」

「俺は自身のデバイスに確認をとった。」

『すみません。戦闘、攻撃に特化して作られたので』

『ハロルドかクレメンテならできたのであろうが。』

「そうか、ならなのはに頼むしかないのか。」

「なのは、お願いできるかい？」

「うんなのは頑張る。」

「よし、よく言った。」

「士郎さんがなのはの頭をなでる。やっぱり親子っていいな。」

「なら、俺はなのはの護衛ってことで受注っていうところかな？報酬はレイジングハートのデータでつりがくると思う。」

「そうか、なら忍に話しておこう。それでいいか？ユーノ？」

「……その前に質問していいですか？」

「ユーノが真剣な眼差しでこちらを見つめていた。」

「なんだい？ユーノ君」

「微笑みながら士郎さんは告げた。」

「あなた達は何者ですか？この世界は魔法といった文明がないはず。過去の歴史や物語といった作品内もの、現実にはないものとされています。なのにお三方はさも当然のように魔法に関する話をされていますね。」

「さすがにハイペースで話を続けていたが、聞かれるか……タイ

ミング的にも丁度いいな。なかなか空気を読める。

「確かにこの世界には魔法に類する技術はある。ただし、その神秘は秘匿され知ったものの口は封じられる。魔術と呼ばれるもので、それを研究し、行使するものが魔術師。魔術師は基本的に表にはでない。また、知られていないことで、神秘の純度は上がる。だから、教えることは親しい人だけ。知られたら隠匿のため命を奪うという例も少なくはない。」

恭也さんが告げて、

「んで、俺はそういう神秘が関わる問題が起きたとき武力介入し、解決する傭兵のような者だ。土郎さんは元だがな。」

苦笑しながら告げる。

「えっと……刀夜くんって私と同年だよな？」

「ああ、うちは万年人材不足でね。六歳から働かせられてるよ。」

まあ、そのおかげで生活費には困らないし、海鳴市にいられるんだがな。

なのはとユーノは驚愕の表情を浮かべていた。

「俺のことはおいといて、ほかに質問は？」

「二人がお持ちのアームドデバイスは何ですか？ベルカのものともいろいろ違うようですが……」

「ああ、ソーディアンか。これに関しては社長から渡されたロストロギアに分類される特殊なデバイスとしか答えられないな。地球以外の世界から持ってきたらしいけど……」

頭をかきながら答えた。実際うちの社長は色々超越している。

転移で異世界にいけるらしいが、なんかこの前アルハザードに行ってきたとか言ってたしなあ。この二本だってある世界の英雄から譲り受けた古代の剣らしいし。

「ああ、あとはこいつら自体がリンカーンコア的なものを持って、魔力が全然無い俺でも扱えるし、変換資質はこいつら自体のものをつかう。」

「リンカーンコアってなに？」

「なのは、リンカーンコアっていうのは、魔法を使う魔力を生み出す器官のようなものなんだ。まだ、そのような技術は確立してないらしいけど、ロストログアだったらあり得るね。」

なのはにユーノが解説した。

「ちなみに俺はなのはの五十分の1ぐらいの魔力しかないから。」
「少ないね。」

「そうだけど、なのはの魔力量が多いだけだから」

一般武装局員より少ないけどね俺の魔力。

「質問は終わりかな？」

二人をみた。うん、

「無いようだったら、レイジングハートのデータをとらせてもらっていいかな？なあに、データを取るといつても明日の午前中、なのはが学校に行ってる間にとっちゃまうるさ。」

「……それに同席してもいいですか？」

「勿論。むしろ来てもらわないと困る。」

「ならその方向でお願いします。」

一通りの結論がでたから解散だな。

「んじゃ、ユーノこっちで預かって行きますね。」

「ええ、ユーノ君連れてっちゃおうの！」

美由紀さんが反論してきた。

「理由は？」

「飼いたい。」

いや、その気持ち解らなくはないけどねえ。なんかユーノも苦笑いしてるし。

「どうする？ユーノ」

まあ、本人の意思を尊重しよう。どちらも受け入れる分に問題なさそうだからな。

「それじゃあ、なのはのところ」「了解。それじゃあまた明日。」

ユーノを机において俺は帰宅した。

第二話 戦略会議（後書き）

刀夜としてはユーノをペットの的な扱いにしてはやての無聊をどうにかできないかなと考えてました。

ちなみに、ソーディアンはベルカ式をベースに作られたデバイスです。アームドデバイスです。バリアジャケットなんて便利なものは使えません。

このような駄文を読んでいただいたことに感謝をノシ

第三話 戦闘なんておまげさ(前書き)

一応原作第四話までの話。

主人公の身体能力は衛宮士郎(身体強化なし)と同程度です。

第三話 戦闘なんておまけさ

「魔王炎撃波」

なのはに迫り来る、犬型の思念体を炎をまとった斬撃で打ち返し、追撃を仕掛けるため距離を詰める。

「紅蓮剣」

そしてデймロスを投げつけ、地面に貼り付けにする。

「なのは！」

俺はなのはに声をかける。

「うん！」

『Seeling Mord』

なのはが速攻でジエムシードを封印した。

「楽勝だったね。」

なのはがうれしそうに言った。いや、なのはは楽だったろうけど、俺はそこそこ頑張ったぞ。一番魔力使ったのはデймロスだし、てか魔王炎撃波はやりすぎだったかもしれないな。

「んまあ今回はこの程度だったってことだが、次回はこう上手いくとは限らない。所詮獣の願望だしな。」

人が関わっていればもっと被害は大きくなっていただろうしな。一休みして帰ることにした。

「サッカーやらないか？」

「だが断る。そんなことよりギャルゲをしたい。」

なのはを家に送り届けた際、土郎さんにサッカーに誘われた。

何でも明日の試合があるけど、フォワードの奴が必殺シュートの練習中、股関節をはずしてでられなくなり、人が足りないらしい。股

関節がはずれるシュートって……翠屋FCはフォワードができる奴が三人しかいなく、ディフェンダーだらけらしい。

「小学生からギャルゲって。たまにははやてちゃんにかっこいいとこ見せたらどうだい？男の子なら好きな女の子にかっこいいとこ見せないと。」

「おい、監督。監督自らそんな発言をするな。それに、はやてはそんなじゃないよ。……まあ、かっこいいとこ見せとかないといけないかな。ちいと最近立場が弱いし。」

最近はやてに構ってあげられないからなあ。

「解りましたよ。まあ、俺がでたら三点ぐらいとれますよ。」

前に一回助っ人をやったときは、8対0で勝ったし。

「それじゃあよろしく頼むよ。」

「はい。」

「プレイボール！」

俺は最初ハーフラインより後ろの位置に立った。相手のミッドフィルダーがドリブルで突破しようとしてくるのをうすく近づきさりげなくボールを奪い去った。

「強行突破！」

そのまま中央を力業のドリブルで突破する。1人、2人、3人、4人！クォーターラインまで上がり、あとは！！

「デッドスパイク！」

気合いを入れてロングシュート。魔力も込めている上左端をねらい大きくカーブをかけている。……もう一般的な小学生がとれるシュートじゃないな。打った俺が言うせりふじゃないけど。

笛が響く。

「当然だ」

ニヒルっぽく微笑んでみる。

「刀夜がやっても似合わんでえ。」

はやての痛烈なツッコミにまわりから苦笑が聞こえた。

「俺頑張ったよね？この扱ひひどくない？」

つつこみを入れながら、少し悲しくなってきた。

「その方が刀夜らしいで。」

はやてが微笑んでいた。やっぱり笑顔で居てくれるとうれしいな。

「うつしやあ、次いくぞ！」

- Side はやて

昨日刀夜が『明日サッカーの試合でないといけなくなった。応援に来てくれないか。』やなんていきなり言い出したさかい、来てみたんやけど、刀夜がんばつとるなあ。いきなりシュート決めてまるやなんて。

「ふええ、刀夜くんすごいね。」

となりにいるツインテの少女 - なのはが目を丸くしていた。まあ、うちも幼女何やけどな。

「せやる、うちの刀夜は色々並や無いで！」

「うちの？」

なんかはてなマークが浮かんでおるな。

「ああ、うち、刀夜と同居してるんよ。」

「ふええ」

なんかめちやくちや驚いとるし。

『つてことは魔術関係者！？』

普通に念話で話しかけてきとるし。まあ、恭也さんの妹やから魔法の才能もあるんやろう。やけど、こうやってきくんわあまり感心できへんわ。自分が魔法が使えるつてことを相手にばらしてしまうさかいな。あと、うちは魔法が使える。

「なにあいつ。あんなシュートまとにも食らったら怪我するんじゃないの？」

金髪の幼女が不安がつてる。何やろう、幼女幼女言つとるとな
んか汚れていく気分がするんやけど。

確かに全力でやりすぎやる。少しは加減しないと。あーあ、マ
ク三人もついとるやないか。

「怪我しないように気付けてえな。」

声をあげた。注意しとかんと怪我させてしまいそうやし。

「刀夜君凄いな。」

すずかちゃんが話しかけてきた。やけども、刀夜がなのはちや
んとすずかちゃんどっちとも面識があるやなんて驚きや。世間も狭
いもんやなあ。まあ、月村ゆうんやさかいTTSとなんか関係ある
んやろうと思っけど、聞くのも野暮やから聞かへんけど。

「そうねえ。身体能力的にはすずかを越えてるんじゃないの？」

「いや、それもそうなんだけどテクニク的にも。何気なくボール
を奪ったり、ちらほら技で抜いてるから。」

二本目のシュートがネットを揺らす。刀夜がマークを抜けて叩
き込んだみたいだ。

「……なんであいつFC入ってないんだろう？普通にエースになれ
るでしょう。」

「そやなあ、たまにふらつといなくなるんやけどクラブに入るぐら
いのゆとりはあるやろうけど。」

金銭的にも余裕はあるはずやし、うちのせいやったらややなあ。
後で聞いてみよ。

「そういえば、はやてってあいつと一緒に暮らしてんでしょ？」

「うん。そやけど。」

「あいつって彼女とかいるの？」

アリサが妙な質問をしてきた。

「そやなあ……。」

本当のことを言っているのかどうか少し悩んだんやけど。

「おらんはずやで。ラブぶすにはまっとするみたいやけど。」

言い表せない沈黙があたりを包んだ。うちはわるくない！悪い

のは刀夜のはずや……たぶん

「……そうなんだ。彼女いないのか。」

アリサはうちの発言をスルーしとった。刀夜に気があるみたいやなあ。

「なんや、刀夜に気あるんかいな？」

「なっ！そんなんじゃないわよ！」

「そんな赤くなって否定するなんて……ナイスツンデレ！」

「ツンデレじゃない。」

なんとというか、おちよくりがあるわ。ツンデレおいしいです。アリサちゃんをおちよくりながら、試合は進んでいった。

Sideend

「ゲームセット！」

ホイッスルが響き渡り、試合が終了した。結果は7対0で翠屋FCの勝利である。俺自身の成績としては3ゴール四アシストという全てのゴールに関わっているという結果に。

「刀夜お疲れさん。……やけどやりすぎやろ。」

「いやいや、小学生のフィジカルで俺の相手とか無理だろ？ サッカ一のワンONワンで恭也さん（超高校生級）から一点はぎ取れるんだぜ……二点とられるけど。」

「なんか聞けば聞くほどチート臭いわね」

金髪幼女があきれながら言ってきた。

「まあ、チートだし。」

俺は苦笑いしながら言った。ただでさえ高い身体能力を、魔力を使ってさらにバンプ。で、技術面に関してはこれまた魔術を使い超高効率のイメージトレーニングをやることで大いに時間を短縮している。自分以外の人間、今回はセリアAの某選手の経験を己に投

影する。しかし、その経験は己の経験ではないから、誤差がでる。あとは実際に体を動かして自己流に改変していただくだけ。まあ、分的には経験値チートになるのかな？

なーんて考えながらどや顔をした。

「……なんというか、三枚目ね。」

アリサ、いきなりその発言はないと思うぞ。なんかなのはとすずかが苦笑してるし、おい、はやて何でどや顔をする？

「なのはいいかい？」

土郎さんがなのはを呼んでいった。多分ジエムシードかな？

なのははその場から離れて行った。物陰でレイジングハートだけ展開してジエムシードを確保していた。

あとから聞いた話によると、ジエムシードを持ってたのはキーパーで彼女へのプレゼントにするつもりだったらしい。事情は話せないけど回収しないといけないから、俺への報酬にしたいということにして確保。代わりに護石を渡したらしい。いや、散財乙。護石つて一万ぐらいするんだよなあ。

「本日の勝利に乾杯！」

土郎さんが乾杯の音頭をとり翠屋でパーティーが始まる。俺は？もちろん！

「レッツパーティー！」

はやてたちとここで叫んでみた。パーティーといえばこれだろ。

「うるさい！」

アリサからの右フックを交わした。

「ツッコミに右フックはひどくないか？」

「そうそう、一応今回のMVP何だし多少ハメ外したっていいんじゃないかな？」

すずかがフォローを入れてくれた。

「まあ、俺は今回助っ人にすぎないからな、このぐらいにするけど。」

「あんまりはしゃいじゃいけないだろ。なので外席ではやてたちと五人で座っている。」

「刀夜もお疲れさん。」

「俺頑張ってみた。誉めろ」

「ほめてもらうのを求めるな。」

「そうだな」

「ユーノ君って可愛いよね。」

「そうだね賢いし。」

「こんなこともできるよ。お手。」

なのはが手を差し出すとユーノがお手をした。

「かわいいなあ。うちもやりたい。」

「いいよ、」

「せやったら……お手、おかわり、反省、チンチン」

ハリセンではたく。てか反省までやるなよ……

「女の子がチンチンとか言うなよ。ユーノも硬直してるじゃないか」

みんなして苦笑していた。

「みんなはこれからどうするん？」

はやてがみんなに尋ねた。

「これからみんなでドライブにいくんだ」

「私はパパとシヨッピング！」

「私は疲れたがらもう一眠りするね。」

「さすが、アリサ、なのはが答えた。なのはの意見がオッサン臭いとかはつつこんだら駄目。ジエムシードの封印とか、魔法と出会ったりといういろいろ気疲れしてるんだろう。」

「俺は予定もないし……はやて、どっか遊びに行くか？」

「軍資金は三万あるし問題ないな、最近はやてと一緒にいる時間が減ったしな。」

「そやな。まずは books かな。」

「んじゃ一度帰らないとな。」

「このままいったらなにも買えないしなWWW

第三話 戦闘なんておまけさ(後書き)

キャラ崩壊しました。はやては重度のオタクです。サラブレットです。

やっどギャグつぼくなれたかな？個人的には微妙

刀夜の魔術に関する記述があります。これ、チート？ってかんじですが、非転生の小学三年生がまともに戦えるぐらいの経験値を得る方法なんてこれぐらいですが……因みに欠点としては経験を得るには対象の物品に一时间程の魔術行使、さらにはひとどつりやってみての調整、自己ではないから起こるミス等があげられます。結局時間短縮にしかありません。

この時点ではやては三人娘と友達になります。

基本は刀夜視点の形式なのですが、今回はSide を使い視点を変えてみました。

次はついにフェイトが登場！寂しい目をした彼女に刀夜は……後ユ
ーノこのままペットライフでいいのか？

それでは次回をお楽しみにノシ

第四話 運命の出会い（前書き）

フェイトをいじりきれなかった。

すみません。投稿十時間遅れました

第四話 運命の出会い

「……お邪魔します。」「……
いらつしやい。」

俺らはすずかに誘われて月村邸に来ていた。

「今日はいい天気ですから、庭にお茶会の用意をしたのよ。」

忍さんが朗らかな笑みを浮かべて教えてくれた。

「ありがとうございます。……それじゃあこいつも頼みます。」

そう言つてデймロスを渡した。今日来た理由は、表向きはずかのお茶会、俺と恭也さんはデバイスの定期整備である。

「はい。それじゃあ恭也、手伝つてくれるかしら？」

「もちろん」

「ファリンお願い。」

言葉を交わして2人は別室に移動した。

はやてと一緒になのは達の学校の話聞く。

「楽しそうやなあ。」

はやてがしみじみと言った。原因不明の足の麻痺。魔術的な素質に恵まれてるはずなのに、全く魔力のない状態。こいつはその様々な理由から小学校には通っていない。俺とはまた違う圧力がこいつにはかけられている。俺にもう少し力があればなあ……

「はやても学校に行けるようになるよ！」

アリサが励ました。

そうだな今は行けないけど来年度までには……思いを心の中で固めた。

「そうやな。まあ、行けるようになって、聖祥いけるかわからへんけど。」

はやては苦笑いするが、「多分行けるだろ。理事長とは仕事一

緒にしたことあるし、最悪奨学金とかフル活用すれば。」

あの人なら事情を話せばいろいろ融通してくれるだろうし。

「ちよつと待った!」

「なに?」

「どうしてあなたは理事長と一緒に仕事してんのよ。」

アリサ以外からはやつちやつたなあという空気が漂っていた。

「あの……ああ、あれだ国家機密に関わってくるから聞かなかつたことにしてくれ。」

一応違つてはいない。

「それで納得できると思つてるの?」

「いや、全く俺ならむしろ気になるけど、命は惜しいから深くは突つ込まないだよな。なのは」

「ふえええ?知ったら人生が変わつちゃうこともあるからね。好奇心じゃ近づきたくないかな」

いきなり話を振られて焦つてはいたが、なのは意見を上げた。「そうね。気にはなるけど知らなきゃいけないことではないからね。」

アリサは引き下がった。ああ、良かった。アリサは世界シェアの企業の令嬢だから知られるといういろいろめんどくさい。

「そう言えばあんたつて学校じゃどんな風にしてるの?」

「ああ、俺は普段は……」

ふと、学校での出来事を思い出した。……普通じゃないな。

「そうだな、普段はヅラと晋作と一緒に遊んでいてな、コイツ等がまた濃いメンツでね。」

はいそこ、お前も普通じゃないだろとか言わない!

「なんかヅラは意味不明な発言するし、晋作はたまに破壊衝動全開になるから止めるのに苦労するんだよな。」

「破壊衝動全開の小学生つて。」

しばらく学校での話をした後俺たちはゲームをはじめた。某狩りゲームだ。

「畏落としたぞ」

「それじゃあ全力全快竜撃砲。」

「鬼神化入ります。」

「よっと、ヒット！」

使用武器は俺弓（普段は大剣）。なのははAGガンズ、さすがが双剣、アリサが大剣だ。女性陣が普通に近接特化って。なんかガンナー防具作ってなかったし。

「んじゃ球投げてっと。」

捕獲した。

「終わりっと」

4人でやれば、ギギ10体だって狩り切れるさ。

「やったね」

報酬のアルビノエキスもたっぷり手に入ったな。

「む？」

ジエムシードが起動したようだ。まずはデバイス回収しないと。恭也さんとことつてくる。」

濡れ場なら気まずいな。

「うちもいく。」

濡れ場希望か！？

「私も往くの」

漢字違っよ！何を征するつもりなの？

「私は遠慮しとくわ。」

アリサとすずかはいかないようだ。

「うわ、気まずいな。」

盛ってましたよ。まだひも高いのに。まあ、事後っばいし辛う

じてかな。

「悪い子はいねえか！」

若本風に入ってしまった。「うわ、匂いが……ちょっと盛っちゃいそうや。」

「大丈夫じゃないな。はやて」

「ちよつ、いきなり入ってくるな。」

「そうよ。空気は読まないと。」

2人は慌てていた。

「いやあ、本音はとつりたくなかったんだけど、ジェムシードが起動してみたんだから、ディムロスを回収しにきた。」

「ああ、それならテーブルの上上がったるよ。」

「了解。」

『なのは、結界で隔離したら、なんか女の子の魔導士が攻撃を開始したよ。』

『私達もすぐいくから、隠れて待ってて。』

「ファイヤーボール！」

先手必勝とばかりに、火の玉を飛ばした。

黒い服着た少女は難無くそれをかわす。

「フォトンランサー」

反撃の魔力弾を飛ばしてきた。牽制とばかりに飛ばしてきたのを俺はきりとばそうとして……

「しいびいれえるうう」

感電した。

Sideフェイト

母さんに頼まれてジェムシードの回収にきた。一つ目のジェムシードを封印するため戦闘を開始した。おっきいネコをボコボコに

するのは気が引けたけど、母さんの為、涙をのんで叩きのめしジェムシードを封印した。子猫が元のサイズに戻り、すやすやと寝てる。「ごめんね」

謝ったのは自己満足でしかないけど。

「ファイヤーボール」

声が聞こえて、火炎弾が飛んでくる。不意打ちだったら当たるだろうけど、十分にかわせる。かわしたら反撃！

「フォトンランサー」

魔力弾が相手に迫っていく。えっ、剣のデバイスで切った。でも感電してるし。フォトンランサーをきりとばした少年の後ろには少女がいて、

「お願いレイジングハート！」

バリアジャケットをまとい、杖をこちらに向けてきた。

「同系の魔導士……ジェムシードの探求者か？」

もしそうだったら、戦わなければいけない。だったら。

「バルディッシュ」

『サイスフォーム』

戦うまでだ

S i d e e n d

感電状態から回復すると、金髪の少女が鎌状態のデバイスできりかかってきた。まあ、鎌なら。

余力を持って柄を足で押さえつけた。

「えっ？」

金髪少女は呆けているが、実戦でそれはないだろ。ディムロスを突き出した。

「きゃあ」

少女は二メートルほどぶっ飛び、ダッシュで距離を詰めて左手でキャッチする。

「金髪幼女（露出趣味あり）ゲットだぜ。」

「露出趣味なんてありません。」

金髪幼女は反論してきた。

「んじゃ、」

そのまま体勢をかえ引き倒した。

「事情聴取といきますか。えー、まずお名前は？ペンネームでも構いませんよ。」

だんまりか、

「それじゃあ、痴女幼女か金髪レイヤーかどっちがいいと思うのは？」

戦闘開始かと意気込み突進して来たから空に逃げ出したなのは聞いてみた。

「初対面の人にいきなりその呼び方はひどいと思うけど。後の方がましだと思うの。」

「よし、なら、金髪痴女レイヤーさん。そのコスの作成者は何者ですか？」

「全部のせ！むしろ、一つ目の質問がそれって。」

涙目になりながらツツコミを入れてきた。

「名前も聞いてないし、それにそんな職質くらいそんな格好だから、金髪痴女レイヤーさん。」

「私の名前はフェイトです、フェイト・テストロッサです。」

名前ゲット。

「んじゃ、次の質問。テストロッサはどうして、ジエムシードを集めてるんですか？」

「それは言えない。」

「まあ、急いで事情を話してもらおう必要もないかな。背中にかかなりの傷とか。いろいろあるし、手段を撰ばな……………」

「フェイトを離せー」

犬耳の女性が跳び蹴りしてきた。俺は軽く舌打ちして、フェイトを反対方向に飛ばしながらかわす。

飛んできた女性はフェイトを確保すると飛んでいった。

「逃げられちゃったね。」

「ああ、」

「あつ、思い出した。」

「なんだデイルロス？」

「多分なんだが、あの子は私の前の持ち主の縁者かもしれない。」

「……………マジで!？」

第四話 運命の出会い（後書き）

戦闘が出来ませんでした。あと、格闘戦はかなりスキルが高いのでこんな結果になりました。フェイトファンのみなさまごめんなさい。

あと、恭也は盛らせました。何というか、Vividまで書くこと考えるとそろそろ子づくりを初めてもらおうかと……

考えるとアリシアの父親の設定って明かされてない気がする。

第三話タイトル修正見たら二話になってました。
タグ追加、ちなみにクラスメイトとしては、桂小五郎、高杉晋作、坂本龍馬、月読がいます。クラスメイトは増えるかも

次は間に合わせて見せます。では次は四日にノシ

第五話 温泉来たけど遊んでました。(前書き)

諸事情により更新を二日おきに変更させていただきます。

やはり、見切り発車で一日おきは無理がありました。

そして、なぜ温泉にそんなもんがある？

今回はSideチェンジによるサービスシーンはカットしました。
ごめんなさい。

あれ？おかしいな爛れてるのにエロが足りないか……そのうち増量
しよう。

第五話 温泉来たけど遊んでました。

「ふうむ。極楽極楽」

温泉につかりながら思わず言ってしまった。ジジ臭いとか言うな一応九歳なんだぞ。

「そうだね。確かに極楽だ。」

士郎さんが杯を傾けながら同意した。ってか、今春だよな？そ
ういうのは雪見しながらとか、月見しながらするもんじゃないのか？
「それもそうだが、父さんもこんな時間から……」

恭也さんも呆れながら同意した。

隣からなんか嬌声が聞こえるけど気にしたら負けだ。

俺たちは高町家主催の温泉旅行に参加している。高町家では毎
年この時期、スタッフだけに任せて（ケーキの下拵えとかはしてた
みたいけど）一泊二日の温泉旅行を行っている。今回は家族ぐる
みでつきあいがある、月村家、俺、はやて、アリサが呼ばれている。
バニングス家は仕事の都合によりアリサのみの参加だ。

「しっかし、隣は姦しいな。おやじの魂をもった奴でもいるのか？」

呟いた。……そういえばいるなあ。

「はやて、あんまりセクハラすんなよ。」

俺は怒鳴ってはやてに注意を促した。

「忍もな」

恭也さんも言っつて、俺たちは苦笑した。

「カーテンガーデンリリー」

「ぎよへー」

「ディストーションフィニッシュュ！」

「うっしやウチの勝ちや。」

「はやて……強すぎない？」

いまはずかとはやてが格闘ゲームをやっていた。

館内備え付けのアミューズメントコーナーを物色してたときに「ああ、これうちにあるやつと一緒にやんか。」とはやてが気がつきやることになったのだが……

「ううう。二人とも強すぎなの。」

俺とはやてが強すぎた。俺は普通に主人公を、はやては連携を極めるとキモイ吸血鬼の姫を使いこなしていただけた。

うん。酷い。そんなわけで、これ以降は俺とはやてを外して三人で交代でやっていた。なのはが酷い。飛び道具を軸に弾幕戦とか……すずかはハザマか、あまり素人向けじゃないんだよね。強いことは強いが、如何せん技を把握しないと外しやすくて。まあ、そんな感じで格ゲータイムに入っていると、女性がアミューズメントコーナーに入ってきた。ん？どつかでみたことがある気がする。……ああ、フェイトを助けたやつか。

「私もいいかい？」

アリサに話しかけた。

「そうね、あんまり私たちだけでやるのもね……」

「それじゃあ、その坊やに勝負を挑もうかね。」

そう言っただけに勝負を挑んできた。なのはも正体に気づいてないみたいだし、スルーといくか。

「いいぜ。まあ、大したこと無いけど相手させてもらおうよ。」

俺は卓につく。キャラセレで俺は主人公を、女性は忍ばない忍びを選んだ。ちなみにこの筐体、全キャラアンリミテッド仕様である。

「ラウンドワン…アクション！」

「先手必勝！」

忍びが突進して来たから。

「カウンター、カウンター」

弱攻撃でカウンターを決めて、対空技で打ち上げ、キャッチア

ンドリリリース。拾おうとしたが、空中リカバリー、コマ投げ二回をされる。投げぬけをして、こちらも連携するが、相手もスーパーモード突入。…少し本気で行くか……。相手の動きを確認して、必殺技でカウンター。

「デイストーションフィニッシュ！……ユーウィン！パーフェクト」
まあ勝利した。え？本気カッコ悪い？まだ余裕だけど。

「ラウンドツー…アクション！」

戦い始めると、念話が飛んできた。

「昨日はうちの子が世話になったね。いい子にして、ジエムシードから手を引きな。じゃないとガブツといっちゃうよ。」

「こつちも仕事でね。ジエムシードを安全に処理させなけりやいけ
ない。敵対されるのは面倒だかな。」

そして、フェイトのことを思い出して。とりあえず聞いておく
か。

「そういえば、あいつ、かなりボロボロだったけど大丈夫か？背
中に大量の傷があったけど。」

「なっ！」

女性は大いに驚いていた。そんなに驚くことか？普通に取り押
さえたら気づくと思うが……

「それは本当か？」

ディムロスが尋ねてきた。

「ああ、てかやらせてる奴の顔が見てみたいな。そんなぼろぼろな
子を休ませないなんてな。」

「ああ、そうだね。つたくフェイトはなんであんなババアの為にが
んばってるのかね？」

情報ゲット。ちなみに俺らの念話は指向性のものなのでなのは
達には聞こえていない。

「ふむ、私も二つほど訪ねたい。君の名と、フェイトの母親の名を。
私はディムロス。こやつ、刀夜のアームドデバイス。かつて我を携
えしは、スタン・テストロツサ・エルロンだ。」

「マジで!?!」

俺と女性は驚いた。嘗ての持ち主名は知っていたが、Tがテストタロツサだったとは。

『……ああ、私はアルフ。ババアの名前はプレシアだ』
『そうか……』

ディムロスは1人考え込んでいた。

「なのはこのまま行くとこの前の幼女、フェイトと遭遇する事になると思うがいいか?」

「私はあの子とお話がしたい。とつても、悲しそうな目をしてた彼女と。」

俺たちは今ジエムシードの反応に向かっている。その際なのは尋ねた。

「……悲しそうな目か……」

なのはは孤独を恐れている。だから余計にこういうことに敏感なんだろう。

そして、俺たちはフェイトたちと対面した。

「やっぱりきたのね。……一応忠告はしたけどね。向かってくるなら……ガブツといっちゃうよ!」

狼形態になったアルフがこちらに向かってきた。

「こつちは話し合いがしたいんだがな。」

そう言いながらアルフをぶっ飛ばす。

「こいつは僕に任せて。」

ユーノがアルフを強制転移した

「話し合いでどうにかならないかな?」

なのはが尋ねた。

「言葉だけじゃ、なにもかわらない。あなたと私の目的は交わることはない。だから、お互いのジエムシードをかけて。戦って」

そう言っつて、

《フラッシュムーブ》

なのはの背後をとった。なのはは直感的に攻撃をかわして距離をとった。俺はそれに応じて、距離を詰めて横合いから袈裟ぎりにするが、空に舞い上がってかわされた。

ヤバい。こっちは空が飛べない。空中からねらい打たれたら無理だ。その上発言が完全戦闘狂のものだし。思い詰めすぎだろ。

「でも、うっただけうっつておくか……ファイアーボール」

『だが断る』

「断るな！」

デймロスが反抗期です。

『彼女たちは決闘をしているのだぞ。それに手出しするような、無粋なマネは許さん。それに……』

「確かにそうかもしれない。でも、言葉にしなきゃ伝わらないことがあるんだよ！」

『なのはならフェイトの心を開けるかもしれない。』

「随分と保護者然としてんだな。」

そんなことをつぶやいていると。なのはとフェイトが砲撃対決して、なのはが打ち勝っていた。

「うん、魔力は高いけど。経験値が足りないか。」

砲撃をかわしたフェイトがサイスを首に当てていた。……非殺傷なんだから振り切れればいいのに。……あれ？殺傷設定？

ジェムシードをなのはから受け取り、フェイト達は去っていった。やれやれ、面倒なことになっちまったな。

俺は去っていく二人を見ながら。そう思った。

帰り道

「そついえばお兄ちゃんは？」

「土郎さんに飲まされててダウンしていた」

「お兄ちゃん……」

第五話 温泉来たけど遊んでました。(後書き)

刀夜「内容薄いなおい。」

天宮「あとがき一言目がそれか！

そんなこんなで後書きの改変を始めさせていただきました。」

刀夜「どんなこんなだよ」

天宮「いやあ、他の作者様があとがきに自キャラを出してるのをみて、やりたいなあと思っていたから、やってみた。更新のペースを落とした代わりにというわけだ。」

刀夜「見切り発進しすぎだろ！」

天宮「それがおれクオリティ」

刀夜「だめなクオリティだなおい」

天宮「まあ、内容は俺が衝動的に考えたものになりますから、勘弁してください。」

刀夜「しっかし、何で俺がこんなことを……その上、なんか変なところに妙な複線おいてあるしょ。」

天宮「まあ、複線少ないとは思っけど。」

刀夜「いや、なにが複線とは言わないが、読者怒らせないようにな。」

天宮「自己満足で書き始めたものになるから大変かもしれないなあ。」

刀夜「何で人事！」

天宮「まあ、もうしばらくしたら話の展開が変わっていくからね。」

……頑張り」

刀夜「何で応援されるんだ？」

天宮「それはネタバレになりそうだから言えません。」

刀夜「そっか、まあネタバレならしかたないか。……普通、温泉に格ゲーとかないよな。」

天宮「言うな、本当は別の話でやらせたかったけど、なんか普通小

学生って温泉で癒されてるイメージ無いんで……衝動的にやった。
後悔も反省もしていない。」

刀夜「お前はなにがしたいんだ……ったく」

天宮「話がいい感じでグダグダになってきたので次回予告入ります。

」

刀夜「しゃあねえな。」

母のため、少女は奮闘する。

少女と通じ合うため、友のため、少女は杖を握る。

事態を見守るため少年は立つ。

次回魔砲少女リリカルなのは ジェムシード暴走

お楽しみに。」

天宮「次話は11月8日の予定ですノシ」

第六話

お悩み相談とぶつかり合う思い、後かたづけが大変です。

(前書き)

すみません投稿遅れました。

第六話 お悩み相談とぶつかり合う思い、後かたづけが大変です。

「こりややべえな。」

魔力が荒れ狂い、次元が歪む。見てみるとはのはのデバイスもフェイトのデバイスも傷だらけである。二人は立つこともつらそうだ。

「はあ、」

溜め息をついて自己のうちに集中した。

「あつ、なのはちゃんや。」

一緒に買い物にでたはやてがなのはを見つけた。

「あつ、ほんとだ。でも、ものすごい落ち込んでるみたいだ。」

もう、哀愁というか何というかめちゃくちゃ暗い雰囲気だ。友達とでも喧嘩したのか？多分、フェイトのことでも考えてて呆けてたんだろ。アリスならそんなことでキレそうだし。

「強制連行するか……はやていいか？」

「ええで。刀夜も人がええなあ。」

「まあ、悩みすぎでいざという時に動けないままだと大変だからな。」

「そう言つてなのはに話しかけることにしよう。ココアを自販機で買つてつと」

「なのは！」

「ふえ？刀夜君？はやてちゃんも」

なのははいきなり話しかけられて驚いているようだ。

「今暇してるか？」

「暇といたら暇かな？」

「それじゃあ、少し話をしないか？んな顔してよう、悩み相談ぐら

いサービスでしてやるよ。」

そう言つてココアを手渡した。

「ふえ？そんな……」

なのはは遠慮していた。

「人に気を使うことは悪くはないが、たまには人に甘えても文句は言われんさ。何より、俺が気になるからな。」

「うちかて、聞いてあげるぐらいは出来るで」

二人してなのはを説得し、俺たちは近場の公園に向かった。

「私、フェイトちゃんが気になるの。」

なのはが語り出した。

「綺麗な髪の寂しい目をした女の子。

どうしてそんな目をしてるの？一人は寂しい。誰かと一緒にいたい。そんな風に思ってるのかな？って思うとなんだか切なくて、その気持ちが胸を突き刺すの。フェイトちゃんの事をもっと知りた。もっとお互いのことを知っていききたい。なんだかそう思えて……

アリサちゃんやすずかちゃんとだつて最初つから友達つてわけじゃなかった。話ができなかったから。分かり合え無かったから。思いを言葉にしなくちゃ、なにも伝わらない。

目的がある同士だからぶつかるのも仕方がないと思う。でも知りたいの。どうして戦うのか。どうしてそんな悲しそうな目をするのか。」

なのはは自分の胸の内を語った。

「つたく、だつたら一発ガツンと言葉をぶつければいい。それでも伝わらないなら、武力をぶつける。魔砲には非殺傷設定というのがあるんだぞ。思いと一緒に魔砲もぶつけちまえ。」

「そやそや、一発ガツンと行ってみいや！」

俺たちは真剣になのはの言葉に答える。無責任な言葉かもしれないけど、後のことは当人が答えを見つけない……まだ伝えてないけど、後詰めは用意してあるし。まだ、子供なんだから後片付けは大人に任せとけて昔言われたからな……

なのは俺たちの言葉を受け取り、顔を上げた。

「そうだね。私、フェイトちゃんにこの気持ちをぶつけてみる。」

「いいぜ。なら俺はユーノと一緒にそのための舞台を整えておくぜ。」

「
」
そう言つて俺はガッツポーズを取った。

空は飛べないけど、アルフの足止めぐらいはやってやれないことはない。

「うし、気持ちもまとまっただみたいだし……」

「魔力波動!?!」

まじかよ!?! 結界も張らずに魔力放出してジェムシードを暴走させるとか。

『あの馬鹿者が!?!』

デймロスも半ギレだし、これは要OHANASIIだな。

でも、

「私も征くよ。」

なのはも気合い入ってるし。

『ユーノくん』

『僕も確認してる。今、封鎖結界を展開するから、なのは達もこっちに来て。』

『わかった。お願いユーノくん。』

『うん!』

ユーノも夕々の出番で気合いが入っている。むしろ好都合だ。ただ問題があるとすれば、

「うちはひとりで帰るで。」

「UZIIちゃんが入ってるか?」

「うん」

そう言っではやては車椅子を操作して車輪横に作っておいた隠しポケットを開いた。

俺はそれを覗いて確認した。なのはに見せるわけにもいかんしな。予備カートリッジも4つあるし、何とかなるか。保険にすぎないし。

「悪いな。」

「ええんよ。うちがいても足で惑いでしかならへんし、大変なことにはならへんやろ。」

「大変なことにならないよう全力は尽くす。おいしい料理期待してるぜ。」

「任せときいや。ほな、なのはちゃんもがんばってなあ」

「うん！」

なのはと言葉を交わしてはやては帰って行った。舞台は整った。

「よし俺達も行くぞ！」

駆けつけると、フェイトがジエムシードを封印しようとしていたところだった。ユーノも既に結界を張っていた。

「なのは！」

「リリカルマジカル。ジエムシード封印！」

なのはの放った閃光とフェイトの放った閃光が交差しジエムシードを待機状態にした。

「なのは！いけ！」

「うん！」

なのはが飛び上がろうとしたとき

「やらせないよ。」

「悪い子にはお仕置きだ！魔王炎撃波！」

炎がアルフを襲った。

「きゃあ、」

視界がはれるとフェイトが佇んでいた。

「この前は自己紹介できなかったから言うね。私はなのは。私立聖祥大付属小学校三年高町なのは。あなたは？」

「ついでに俺も……俺は海鳴第1小学校三年二組のゴミ係、紅竜刀夜だ。」

《サイズフォーム》

「こっちの作戦を宣言する。なのはフェイトは任せた。俺とユーノは、アルフを」

先に宣言をしておこう。

フェイトは無言でなのはを襲った。二人とも空中で砲撃を交えていく。

「それじゃあ、俺たちも戦うか……」

「うん。」

ユーノが力強く頷いた。さあ、OHANASHIの時間だ。

「ユーノ、俺が次ぎぶつ飛ばしたらバインドを頼むぞ。」

「了解」

俺はダッシュジャンプし、ビルの壁を蹴り、アルフをぶつ飛ばす。ユーノがすかさずバインドをした。

「んじゃおまけ、フレイルムシュート。」

火炎球二発をぶち当てる。

「デイルロス。適当にファイヤーボールを撃っていけ。教育的指導だ。」

「あまりやりたくないが、事情が事情だ。仕方あるまい。ファイヤーボール」

火の玉がアルフに当たる。

「フェイトちゃん。前に言ったよね。言葉だけじゃ何も代わらないって……だけど言葉にしなくちゃ伝わらないことだってあるよ。ぶつかり合ったり、競い合ったりすることは仕方がないことだけど、なにも知らずに戦うなんて悲しすぎるよ！私はそんなのいやなの！」

剣戟を交えながら、なのはは思いを伝える。

「私がジエムシードを集めているのはユーノ君が集めてるから、ユーノ君が見つけたからもどどりに集め直さないといけないから。最初はお手伝いだったけど、今は自分たちの意志で集めてる。この町や大切な人たちが傷付くのがいやだから。それが私の戦う理由。」

「私は……」

「フェイト！言わなくていい。大切な人と一緒にいられる奴らなんかに言っただってどうしようもない。そんなことより、私たちの最優先事項はジエムシードの捕獲だよ。」

「ほお、話す余裕があるか……ディムロス！」

このタイミングで口を出すか……

『「フレイムストーム！」』

焔の嵐がアルフを苛む。「まったく、これはなのはと、フェイトの戦い。使い魔とはいえ、口出ししちゃあいけねえよ。あと、管理外世界であり派手に動くな。過ぎた技術は文明を滅ぼしかねない。ためえでその咎を背負えるのか。あんな女の子にそんなもん、背負わせようって言うのか？」

アルフは口ごもった。

フェイトとなのはは既にジエムシードに向かっていた。そしてジエムシードを挟んで二人の杖が交差する。

「あっ」

「え？」

「やっちゃったの」

「ふえ？」

「マジで？やばいなこりゃ。」

ジエムシードが暴走した。

己が宿す剣を思え。己の因子を解き放て！

「聖剣抜刀！」

己のうちから一振りの聖剣を取り出す。俺の魔力に染まった黒き聖剣を！

「状況が状況だ。ユーノ！ジェムシードを破壊する！」

「破壊なんてしたら魔力の暴走が……」

「大丈夫だ。補正があるから問題ない。時間も俺の余力もない……」
俺は後ろ下段にかまえた。

「真名限定解放……」

己のありつたけの魔力を聖剣に注ぎ込む。

「卑王鉄槌！」

己の魂を載せて振り抜いた。黒い奔流がジェムシードに襲いかかった。

魔力と魔力がぶつかり合う。数秒張り合っていたが黒い奔流が光を消し去った。

「これが限界だあと、頼んだぜ。」

魔力ぎれで目がかすむ。腕のけがから結構量の血が流れてるな。剣が体内に戻って。俺は意識を失った。

第六話 お悩み相談とぶつかり合う思い、後かたづけが大変です。

(後書き)

刀夜「投稿また、おくれたな」

天宮「ごめんなさい」

刀夜「予約投稿つてのがあるんだから二日前ぐらいに書き上げちまって投稿しないとダメだろ！」

天宮「そうしたいんだが、少し仕事が忙しくて。」

刀夜「言い訳が見苦しい。よそ様なんて、これよりキツイスケジュールでも、もつと多い量を書き上げてんだぞ。社会人なんだからしつかりしろよ。」

天宮「言葉もありません。つて、俺なんで自キャラの小学生にしかられてるんだ!？」

刀夜「弁解の為じゃない?感想一件それも初投稿時だけだし」

天宮「うっ」

刀夜「ったく」

そこのダメな大人に変わって挨拶します。この話を読んでいただきありがとうございます。

そして、今作品で初の宝具使用！」

天宮「ただし非正規の持ち主な上に魔力不足とかなりギリギリの使用です。」

刀夜「だから劣化しての真名解放しました。」

天宮「因みに卑王鉄槌が劣化しての真名つて言うのは独自設定です。」

刀夜「てか、タグ見て名前見て、俺がこいつを使うことが読めてた人が多いと思うが、卑王鉄槌を出すのを読めた人は少ないと思うなあ。」

天宮「この時点で正規のははなたせなくなかったんで……」

刀夜「ふーん。あと、どうしてはやての車椅子にサブマシンガンなんて積んでんだ?」

天宮「夜道を車椅子の幼女ひとりで帰すなんて危険だから、危険にしてみた。弾は実弾じゃなくて血糊弾。当たっても骨がおれる程度の威力しかない。」

刀夜「だよね……待て、リリカルなのは世界観的には質量兵器ってまずくないか。」

天宮「そこは気にしないで」

第七話 病院にて（前書き）

投稿遅れました。

第七話 病院にて

「この、どあほう!」

病室にきたはやてが開口一番に言った。

「わりいわりい」

事情が事情だけに大目に見てもらいたいものだが難しいかな？そう思って右手で頭をかこうと手を挙げたが……右腕が肘からない……

「『わりいわりい』やあらへんで!どないしたら右腕無くなるんねん!」

はやてが泣きそうになりながら、言ってきた。

「わりい。けど、腕一本で地球を救えたって考えたら儲けもんだって考えては……」むりや「くれないよなあ。」

俺は頭を抱えた。義手は当てがあるからなんとかならなくはないが、はやての泣き顔は見たくない。自分のことを大切に思っているのはうれしいけど。今回はどうしようも無かったかな。

「はやて、ごめん。」

「謝らんでええねん。無事ではないけど帰ってきてくれたから。やけど、傷付いて、そのそばにいられへん、支えられへんのが悔しいんや。」

「はやて……俺の帰るところはお前だ。お前は俺の支えなんだよ。」

それと、俺はお前を遺して死にはしないよ。」

残った左腕ではやてを抱き寄せた。

「ふえっ!?!」

はやてがあたふたしていた。車椅子が床に倒れた。

「だから泣きやんでくれないか?はやての泣き顔は見たくないんだ。」

そして、抱きしめる。

「はやてごめん、心配かけて……だけど俺はまだ退くわけには行か

ないんだ。デイルロスのマスターとして……」

なのはとフェイトの戦いの結末を……どんな結末になるかはわからないけれど、俺はやらなくちゃいけないだろう。彼女の父の剣を受け継いだ男として……

「お邪魔します」

なのはが入ってきて。俺たちの姿を見て。

「お邪魔しました。」

扉を閉めた。

「なのはどうした？」

「邪魔者は空気を読んで立ち去るの……」

「なのは？」

なんて会話が扉の向こうから聞こえてきた。それを聞いてはやはり少し焦るが、

「邪魔じゃないから入ってきて。むしろ恭也さんヘルプ。」

左腕一本じゃ、車椅子に座らせられないな……

「あ、ああ。」

それに応じて恭也さんたちが入ってきた。

「……なのはの判断は間違ってたよ。ちょっと失礼。」
恭也さんははやてを車椅子に乗せてくれた。衝動でやったんだ赦してくれ。

「良かった目を覚ましてくれて。今回は僕たちが至らなかった故にこんなことになってしまっ……」

「きみは何者？」

そう言っなのはの隣にいる明るい金茶髪の少女のことを確認した。

「ユーノ君だよ」

……え？

「ユーノ君って人間やったんや。まあ、人外とも何遍があったことあるさかい、そこは驚かへんけど。」

「君付けて呼んでたから男だと思ってた。」

「失敬な。僕はれつきとした女だ。まあ、口調とかでよく男に間違われるけど、僕は女だよ。」

頬を膨らませながらユーノは言った。……僕っ娘ですね。いいと思います。

「で、ユーノの人間状態初見なんだが。状況を説明してくれないか。今起きたばかりで日時もわからない。」

「言われてみればそうやなあ」

一番に気づいた人に教えてもらいたかったなあ。

「それじゃあ、僕が。今日は4月30日」

4日か……出席日数足りるかな。……いららないな。

「その後、フェイトもなのはもボロボロで気絶してたんだ。だからアルフがフェイトを連れて逃げたとき、恭也さんに連絡して、病院に搬送して貰ったんだ。」 「俺が言ったときの状況は酷くてなの。俺が言っただけで済んだよ。」

ため息をつきながら恭也さんは言った。俺の状態そんなに酷かったのかよ。多分昨日までミイラ状態だったんじゃないのか？

「ふむふむ、それで？」

「翌日レイジングハートもギリギリの状態で恭也さんとなのはと僕とでジェムシードを確保したんだ。」

それでその後、帰ろうとしたら、時空管理局の執務官が来て事情が聞きたいとのことで任意同行されて、事情を話したんだ。

自分たちがジェムシードを確保したのは管理局が動かなかったから。っていつたらなんか執務官の男の子クロノが謝罪してきて、それではということだ。『これからのジェムシードの探索はこちらでやる。一般人は関わらないでもいい』とか言い出したから、『レイジングハートはジェムシードを封印するために創られたインテリジェントデバイスだからむしろこちらに協力してもらいたい。』っていい返してやった。」

なんか今聞き捨てならない発言があった気がする。

「レイジングハートってミッド式のデバイスだよな？ジェムシード

を封印するために創られたってことは一般的なものとは違うのか？」
「なんでも、レイジングハートは旅の魔法使いが悪ノリで創ったデバイスでジェムシードを集めれば集めるほど性能が向上する成長型デバイスって聞いたけど。」

悪ノリでデバイスを創る旅の魔法使い……魔坂とは思うけど。

「その魔法使いの名前ってゼルレッチ・シュバインオーグとかって言わないか。」

「そうだけど、なんで名前知ってるの？」

俺と恭也さんとはやては頭を抱えた。

宝石翁自重しろよ……

「いやな、その人この星の人で魔術の世界では五指に入るぐらいの有名な人なんよ。」

「なのはは絶対弟子入りするなよ。下手すると町一つ地図から消えるから。」

はやてが理由を告げて、恭也さんがなのはに忠告した。恭也さん致死率100%だから、土郎さんと恭也さんが宝石翁に襲撃かけたからって、町一つが地図から無くなるようなことはないだろ。

「弟子入りって？」

「なのはには第二魔法に至る素質がある。次元干渉の力を持つジェムシードが拡張パーツになってるから多分だけど、レイジングハートは第二魔法の行使を可能としうる魔導術礼装かもしれないな。」

「それってつまり？」

「ロストロギアクラスのデバイスになるかもしれない。それも、単独で管理局にケンカ売れるレベルの……」

みんな黙り込んだ。一応フォローは入れておこう。

「理論上だけだし、そのランクまで引き上げるプログラムはレイジングハートには入ってないし。多分ジェムシードを全て取り込んで初めてそのレベルになりうると思う。あとは、レイジングハート自体がそんなバカ魔力に耐えられないだろうし。」

なんというか……レイジングハート怖い。多分平行世界の自分

とデータリンクして機能を拡張してるだろうから既に第二魔法の行使しているんだな。このチートデバイスは……

「……話を戻すね。僕達の言葉を受けてリンディー艦長はこちらに『だったら、なのはさんには民間協力者としてこの艦に滞在してもらって、こちらの指示に従ってもらう形になりますが、ジエムシードの封印を行って貰うというのはどうでしょうか?』って、提案してきたんだ。」

ふむ、リンディー艦長とやらはなかなかめついな。なのはの強大な魔力とレイジングハートという優秀なデバイスその指揮権をすかさず取りにくるとは……

「一応はその条件で協力体制をとることになったんだ。」

「ふむふむなるほど」

一応ということは対フェイト戦のことを考慮してか?

「これが今の状況かな。」

「了解。なら俺は、しばらくゆっくりしてるかな。」

その後たわいもない話を続けた。何というかクロノがかわいそうな扱いを受ける予感がする。

「ほなな」

はやてが病室から帰った。

「んじゃ、そろそろ出てきたらどうだ? 恭也さんも気づいてたぞ。」
そういうと天井がずれてあつくくるしい雰囲気の色が降りてきた。

「よく気づいたな。」

「いや、気づくだろその魂を揺さぶるような熱血な心は」

何とつか熱血回路とつか何とつか、熱い魂がいるだけで共鳴するって異常なほど熱い思考を持っているのだろう。

「……気配ではないのでござるか……」

「気配は解らなかつたな。」

「そうか、拙者の名は獅子神バング！今は無きイカルガの魔導士だ。それがしは怨みはないが以来故に此方へ来てもらおう。プレシア・テスタロツサのもとに。」

プレシアに呼び出しを食らったか……行きたい気持ちもあるが、まだそのときではないか……

「だが、断る。なのはとフェイトが決着を付けてからなら考えなくもないが……」

「そうか、なら仕方ない。」

バングが視線を落とした。何か考えることでもあるのだろう。

「力付くでも来てもらおう。アルフ！結界を。」

「仕方ないねえ。」

結界が展開された。状況は最悪かな。でも、負けるつもりはない。

「獅子神バング母の涙を晴らすため、悪しき男を誘うため、参る！」

第七話 病院にて（後書き）

刀夜「何とか宝石翁自重www」

天宮「仕方ない宝石翁だものwwwちなみに宝石翁の悪ノリデバイスは他にもあります。」

刀夜「まさかのレイジングハートがキャラ崩壊」

天宮「ちなみにプラグです回収する気無いけど」

刀夜「回収する気がないプラグを立てるな。」

天宮「宝石翁もキーパーソンになりはしなくとも、魔導術という魔法と魔術を融合させた技術を開発した偉人といったところですよ。」

これからオリジナル展開がどんどん絡んで来ます。無印編ではそこまで原作改変をするつもりはなかったけどこの結果です。」

刀夜「そして、俺はピンチになっています。」

正直片手であいつに勝てる気しないんだけど。」

天宮「勝っても負けても俺は困らない。」

刀夜「ちよつと、それは酷い。」

天宮「それじゃあ、次回予告。」

傷付いたフェイトと共に時の庭園に戻るアルフ。そこで彼女が見たものとは……

次回魔砲少女リリカルなのは 執念の行く末 次回はフルアルフ視点になります。

本当はかかない予定だったけど。やっぱり入れたくまりました。

第八話 執念の行く末（前書き）

キャラ崩壊注意！

第八話 執念の行く末

「フェイトやっぱり行くのかい？」

私はフェイトに尋ねた。いつても傷付くだけだろうに。

「うん、私が行かないと、母さんはアルフの話聞いてくれないし。」

フェイトが優しく言ってくれた。言えない。実は裏では状況報告とかもしてるし、案外私の方が話を聞いてもらえるって……

「それに甘いものねえ。アイツがそんなもので喜ぶかねえ？」

めちやくちや喜ぶよ……引くぐらい。でも言えない。

「アイツなんて言ったら怒るよ。」

「ヘイヘイ。」

そんな言葉を交わしながら私たちは時の庭園へ向かった。

考えてみるとプレシアが変わったのもあのバカが来てからだね。

鞭の音が響き渡る。だから来ない方がいいって言ったのに……プレシアは今回の件ですべての責任を負って死ぬつもりだ。だからフェイトに嫌われようとしてる。なんとというかその裏の親バカっぷりを見てしまったから、事情は聞いたけどねえ。

鞭の音が消えて、足音が遠ざかる。

「大丈夫かい？フェイト。」

「大丈夫だよアルフ。」

「だいたいプレシアもプレシアだよ。フェイトが頑張ってるのに……あれはないよ。」

「だってジェムシード3つしか確保できなかったのは事実だし……」

それでも十分な戦果だろうけど……

「昨日1つ壊されちゃったしね……」

「その話詳しく聞かせてもらおうかしら。」　プレシアが現れた。多分部屋の外で聞き耳を立ててたんだろう。なんでバレないのだから？フェイトってもしかしてかなりの天然？

「それ、初耳なんだけど。」

そうだった。フェイトはそのとき気絶してたんだった。

「大ざっぱに言うとなのはとフェイトとでジェムシードを挟み込んでしまった後。ジェムシードが暴走して二人がぶっ飛ばされた後。デイルロスとかつて言うアームドデバイスを使ってたやつ、刀夜だったかが、別な剣。なんかとんでもない存在感がある剣でジェムシードを粉碎したんだよ。」

私視点でおおざっぱに言った。

「本当に大ざっぱだね……」

フェイトが苦笑して言った。

「……ディムロスと刀夜ねえ。……久しぶりに聞く名ね……」

そう言えばディムロスはプレシアのことを知ってるみたいだったしねえ。

「その刀夜って子の名前って紅竜刀夜とかっていわない？」

プレシアが尋ねた。

「うん、そうだけど……どうして、母さんは知ってるの？」

フェイトの質問も聞かずプレシアは高笑いをあげた。

「そう、そうだったの。……作戦変更よフェイト。

バングと一緒に地球に向かってもらうわ。バングに来てもらうまで暫くは時間があるわ。万全を尽くさないといけないから、彼が来るまでここで待機してなさい。まだバルディッシュは万全ではないから、時間は必要よ。」

プレシアが狂喜の笑みを浮かべていた。

「ふふふ、なんとしても紅竜刀夜を捕らえないとね。」

「来たかオッサン」

「いきなりオッサンは酷いぞござるよ。拙者はまだ二十代ぞござるよ。」

「……年上だと思ってたわ。」

「ちょっと、プレシア殿まで」

翌日バングが時の庭園に来た。相変わらずいきなり現れてくれるむさいオッサンだ。

ちなみにこの場にはフェイトはいない。プレシアの指示で少し睡眠薬を飲ませて眠って貰っている。

フェイトが同席できないということはアリシア関係かな？

「挨拶も済んだことだし、本題に入るわ。アリシアは研究時の事故で死んだと教えたわよね？実はちょっと違うの。」

アリシアは確かに事故で瀕死の重傷を負ったのだけど、とどめを刺したのは紅竜総司。紅竜刀夜の父親よ。」

「なっ、何だっつて」

とんでもない事実が明かされた。つまりは紅竜総司はアリシアの仇というわけかい。

「つまりは仇討ちを望むのでござるか？」

バングが尋ねた。

「いいえ、少し違うわ。」

彼なら、アリシアの蘇生が出来る可能性があるの。降霊術

……そんな技術が地球にはあるのよ。実は地球は魂の操作に関して
は全次元世界においても最高峰なのよ。その技法は倫理的には認め
られないし、その大半も隠匿されていて詳しいことはなにもわから
ないけど……活用すれば死者蘇生も不可能ではないと言われている
わ。」

「ならその技術を使えばいいんじゃないかい？」

「……それも考えはしたけど、資料が全くなかったのよ。資料を獲
るとしてもその情報の保護のため、虚数領域を利用した罫やら、未
知の技術や、質量兵器を利用した罫、奪われそうになったら施設
ごと破壊するようなことを平然としてくる相手にこちらがとれる手
段はないわ」

「何というかたちが悪いねえ。」

「でも、紅竜総司なら蘇生できる可能性はあるわ。蘇生出来なかつ
たとしても、フェイトのことを任せることが出来るわ。」

「アリシアを殺したやつなのにかい？」

「……どっちにしてもあの頃には救うことができなかったわ……
……脳は大してダメージを受けてなかったけど四肢はひしゃげて胸に
は大きな穴。内臓なんて……」

「もう、やめるでござるよ。」

プレシアはその光景を思い出したのか、涙を流していた。バン

グは手を取って抱きかかえる。

「胸ぐらいは貸してやるでござるから。」

「みつともないところを見せたわね。」

暫くして落ち着いたプレシアが苦笑しながら言った。まあ、紅竜総司はアリシアの仇というのはまた違うみたいだねえ。

「気にすることはないでござるよ。拙者も力が及ばず守るべきものを守ることができなかったでござる。その相手のことを思うと……」

バングが慰めの言葉をかけた。

「そうね、だからこそ私は……」

プレシアがなんか微妙な妙に思い詰めたような表情でバングを見つめた。たまに見せる切なそうな表情。なんか思うところでもあるのかねえ

「話を戻すわ。紅竜総司と接触するために紅竜刀夜を利用するわ。彼を此処に招待するわ。招待に成功したらそのときにフェイトに説明してここに転移してもらっわ。そして、説得を試みてみるわ。」

「招待を受け無かった場合は？」

「蹴散らしなさい。」

プレシアが言い切った。

母としての執念を晴らすため。失った過去と得られぬ未来を抱えて彼女は破滅へ向かう。私にできるのはせめて、その意地を貫かせて、出来る限りあの子を支えるだけ。あの子にはまだ未来が有るのだから……

第八話 執念の行く末（後書き）

刀夜「今回出番がなかった主人公紅竜刀夜です。」

天宮「はい、今回はネタバレ回です。説明回とも言つ。」

刀夜「デймロスの件に関しては触れられてはいないか？」

天宮「……入れときたかったけど入れる段階を見失ってしまったんだ……むしろ、プレシアも知らない事情で刀夜の元へ渡ったんで、」

刀夜「デймロスに聞かないと解らないってわけか？」

天宮「デймロスに語らせるつもりは無いですけど。」

刀夜「それはいいんだけど。フェイト空気過ぎない？」

天宮「仕方ない。彼女の前でプレシアは本当の気持ちや、アリシアのことを明かすことができないし、今回の刀夜に対してはそんな裏からフェイトに知られることなく対応したいという気持ちがあるから……フェイトファンの皆様ゴメンナサイ。次の話でも出番がありません。」

刀夜「フェイト乙

それじゃあそろそろ次回予告に移ります。

刀夜の前に立ち上がる。イカルガの守護者獅子神バング！バングの猛攻に彼は！？

次回魔砲少女リリカルなのは、そう言えばこんな魔術あったよね。」

天宮「それではまた次回ノシ」

第9話 その言えばこんな魔術あったよね。(前書き)

キャラクター崩壊しています。

なぜ戦闘描写の方が地の文が多いんだ？

あと、タイトル詐欺ですね。

第9話 そう言えばこんな魔術あったよね。

「獅子神バングいざ、尋常に参る。」

バングが強烈な回し蹴りを放ってきた。その足にはプロテクションが展開されている。

これは食らうとつらいな。

そう考えて俺は病室のベットから飛び降りる。俺のいたところを襲った蹴りがベットを爆破していく。

あのプロテクション炸裂型かよ!?

「なにそのチート怖いんだけど。」

俺は皮肉げに笑みを浮かべながら、卓上のデймロスを取った。

相手はかなり高い格闘能力があり、先ほどの攻撃はプロテクションを活用しているため、同程度の攻撃より展開速度がチートと言いたいぐらい早い厄介な相手である。それに対してこちらは片腕。それ以外は大して問題ないとは言っても。 張り合えるか？

「デймロス!」

『やれるか?』

デймロスが心配げに尋ねてきた。やはりデймロスも不安なのだろう。

「やるしかねえんだよ。」

やけくそ的にそう応じて剣状態のデймロスを構えた。

自己のうちに集中し己の疑似神経を繋げる。

「術式解放！」

デймロスに魔力を注ぎ込み、身体に魔力を巡らせる。

いける！

魔力放出しバングに突進した。

正面からの一閃！

「正面から！？いいだろう！」

アッパーでこちらの斬撃に対応してきた！？魔力放出によって重さは増しているが、引きが片手では難しいか……

酷い体格差のせいもあり、軽く浮き上がる。　このおっさん

俺の倍以上の体重あるよな！？とはいえ、それは想定内だ。

「もういつちよ！」

「たああ！」

俺の一回転を交えた左袈裟切りとバングが放った左回し蹴りが交差して爆発が起きた。

視界が炎に染まる。

「ここだあ！インフェルノライダー！！」

視界を防ぐ炎ごと飛び上がりながら剣を振り上げる。

これが入れば……

しかしこの一撃は無情にも空を斬る。

「あ、やべえ」

「筋もいいし、胆力もある。素晴らしい。だが、まだ甘いでござる
！」

バングが腰ために力を貯めて、渾身の右ストレートを放つ。

空中ではかわせない。咄嗟に剣を下げてガードするが、ガード
ごとです弾き飛ばされる。

「かはっ」

そのまま、病室の壁に突き当たり、強かに背中を打った。

「ったく、こっちは入院患者なんだぞ……こりゃあしんどいぜ全く
」

そう言ってため息をついた。

魔術回路は普段よりよく働いている。多分聖剣を使ったからだろう。魔力放出による戦闘技法は聖剣からのフィードバックで向上している。とは言え、魔法なしじゃこれが今の限界か……

「デймロスいけるか？」

『当然』

デймロスから魔力が迸る。

俺は立ち上がり剣を構える。

「ほう、まだ立ち上がるか……なかなかに見上げた根性でござるが、これで決めるでござる。」

バングが右腕を突き出し突進してくる。俺はその右腕を受け流し身が膝蹴りをボディに叩き込んだ。

「ぬう。」

「お返した。爆炎連続！」

炎を纏った上段切りをバングに叩き込んだ。

この一撃をくらいバングはぶっ飛ぶ。

「やるでござるな。しかし、まだでござる。獅子神流忍法最終奥義大風林火山！」

バングが金色に輝きだした。ものすごい熱気と魔力が此方にも

伝わってくる。

「なんか影山ヒロノブの熱い歌声も聞こえてくるんだけど。なんか瞳が燃え上がってるんだけど。てか最終奥義なんて使っちゃっていいの？」

「いくでござるよ！」

バングが消えた！？

後ろから掴まれ宙に浮く。

消えたんじゃないやなく高速で移動したってか！？音速普通に越えてやがる。

追撃の蹴りが両脇から襲いかかり、更に上から体を押さえつけながら膝が落とされた。

「ぐあっは！」

そして俺は意識を手放した。

Side バング

なかなかできる少年であったな。一撃一撃が重く鋭かった。さらに成長しもう片方の腕があったら、応戦しきれなかったかもしれないでござるな。大風林火山を使うには四発攻撃を当てなくてはいけ

ないでござる故……

「へえ、うちの息子に勝つなんて、やるじゃないか。」

後ろから軽薄そうな声が聞こえた。

拙者に気づかれることなく背後をとっただと。

焦って振り向くと、金髪的美青年が立っていた。

身長は拙者より少し低く痩せ形。若者が着るようなレザーのジャケットに赤いシャツに黒のパンツ、足元は編み上げのブーツ、それを上品に纏っている。雰囲気が王族を思い浮かばせる。首元まで伸ばした柔らかそうな金髪と赤い瞳、顔立ちは中性的な2枚目で貴公子といった雰囲気がある。

どうかの国の王太子と言っても通じそうな青年は愉快そうな笑みを浮かべていた。

殺気や敵対心などまるで感じさせていない。

故に腹が立つでござる。

「我が子がこのような状態になって、そのような態度をとるとは、貴様は父親か、紅竜総司!!!」

そう言って蹴りを放つが軽く身を引くだけでかわされた。

「一応はな、とはいえ俺が親だとは知らないはずだがな。全然父親らしいことは出来てないなあ。」

そう言つと悲しそつに溜め息をついた。

なにか事情があるでござるるか……

「おいたしすぎて（フラグ乱立アンド回収）、離婚して親権なくして、ついでに会う権利までもってかれた。15股しただけじゃないか。」

結構本気で嘆いている。

「……」

『殺っちゃいな。』

アルフからの念話が届く。

あまりの発言に一瞬魂が飛んだでござるよ。このような下郎生かしておけんでござる。けして、魔法使い一歩手前の童貞男子の僻みとかではないでござるよ。

そつと決まれば。

「この外道が！男子たるもの一度結ばれしおなごがいるのならば、その相手に操をたてるのは当然。それが15股などと申すなど無礼千万！」

漢獅子神バング幾多のものに代わりて貴様を討つ！」

ついでに紫電が青年へ落ちる。

プレシア殿の援護か！？病んでいる体でまたムチャを

「ったく、しかたねえな。戦うつもりは無かったが過剰防衛と
いか。」

煙がはれると青年が無傷で立っていた。

そして、青年が持つ剣に目を奪われる。刀身は漆黒に染まり、
邪気と狂気が伝わってくる。

「な、何でござるかあれは！？」

雰囲気は魔力が人間の域を越えている。

足がすくみ、速攻で逃げたくなってきた。本能が早く逃げると
叫んでいる。

「超越者、月見総司。冥帝王が剣受けきれるかな？」

青年が笑みを浮かべた。

膨大な魔力が剣に集う。部屋が悲鳴をあげはじめた。

「紅月翔閃」

斬撃が放たれるほんの少し前に強制転移され、拙者は建物の外
に立っていた。

剣閃が病院を貫き結界を切り裂く。

食らっていたら死んだでござるな。(非殺傷設定ですWWW)

「ああゆうのをチートっていうのかね。」

アルフが苦笑をあげた。

化け物というのはああいうものか……

……強すぎないか？

第9話 そう言えばこんな魔術あったよね。(後書き)

刀夜「久々の戦闘で敗北した主人公紅竜刀夜です。」

天宮「そう卑屈にならないで、刀夜はかなり頑張ってるじゃない。」

刀夜「ただどタグにオリ主最強チートってあるじゃないか……俺タグ負けしてないか？」

天宮「私としては、刀夜はちゃんと主人公してると思うよ。まあ、今は傍観タイプだけだね。」

あとそのタグは三つのタグに分けてあるし、全部が全部刀夜のことな訳じゃないんだよ。」

刀夜「……軽い詐欺だな。」

天宮「気にしたら負けさ。ちなみにチート最強ダメ人間は今回出るよ。刀夜は気絶中だったからあれだけだ。」

刀夜「いや、俺既にAsまでの話は終わってるんだけど。」

天宮「えっ、まあそうじゃなきゃ会話できないかあ。」

刀夜「てか。あんた、いつの間にか女口調になってるな。」

天宮「これまでが、中性的なタイプ、イメージとしては譲二かな？」

刀夜「いや、イメージが譲二ってwww」

天宮「実はこの天宮っていうのが、私の自己満オリジナル小説の主人公から来てるんだ。」

コンセプトは王道。あとは白馬の王子様なんかじゃなく、むしろ黒馬の霸王様タイプの主人公。ただし、2枚目。」

刀夜「なんだそりゃ。」

天宮「イメージ的にはヘルシングのアーカードと言峰を合わせた感じかな？」

刀夜「中の人一緒じゃねえか。」

天宮「ちなみに最終的な性能は、アルクとケンカできるぐらい。アーカードより強い。」

刀夜「強いな！」

天宮「ちなみに君はその親戚ね。」

刀夜「な、なんだって!？」

天宮「最初はその人を主人公にした二次を投稿しようかな?なんて思っただけど、その人の背景とかそこまで強くなんなきゃいけなかった理由とかいろいろ書くと、オリジナル小説になっちゃうから

……

今の実力じゃあ書ききれないし。鬼畜な主人公がボスを瞬殺し続ける作品なんて書いても、誰にも楽しんでもらえないんじゃないかなって思っただのと……」

刀夜「思っただのと?」

天宮「リリカルなのはの二次創作がおもしろかったのと、ぶるらじが面白かったから」

刀夜「……あんたって人は……」

天宮「そんなカンジで書いてちゃいました。テへ」

刀夜「テへ。とかウザイし、こんな内容こんなタイミングで書く内容じゃないだろうが……」

天宮「口調変えた説明を言うだけのつもりだったのに、まあ、このページのほとんどがノリだから仕方ないよ。」

刀夜「ダメだこの作者何とかしないと……」

天宮「ごめんね。こんな作者で

次回は軽くキンクリします。

刀夜次回予告お願い。」

刀夜「未だ見つからない6つのジェムシード。

母を思う少女は無謀な戦を挑む。

そのときなのはは…… 次回魔砲少女リリカルなのは、ジェムシード封印!」

天宮「タイトルは予告なく変わるかもしれせん。」

刀夜「ダメだこりゃ」

第十話 シェムシード封印！（前書き）

更新大変遅れました申し訳ございません

第十話 ジェムシード封印！

「もう、一週間か……」

俺が意識を戻して早一週間が過ぎていた。

今はアースラに合流しているが、あの後、義手の調整やなんやで時間がかかり、昨日から世話になっている。

現状こちらのジェムシードは8個か。もうこの時点でレイジングハートの性能は従来のものより高めな。多分演算能力だけで言えばアースラ内の全コンピュータと大差がないはずだしなあ。それに対してフェイトが確保したものは6つ。

あと6つか……

先週の襲撃のことはなのは達には伝えていない。あの場にはフェイトはいなかった点と。バングとアルフはあれ以降確認されていない点の二つがあるからな。応戦したのはチート社長だしなあ……

……生きていればいいんだけど。そう思わずにはいられなかった。

「ったくあの人は……」

俺は右腕の義手をみた。

黒鉄色の右腕。腕にはディムロスのコアが入るぐらいの穴があ

り、手の甲には六絨星の描かれた円形の核。

何でも、忍さんと封印指定の魔術師の合作で、デイルロスやシャルティエやレイジングハートのデータを元にして作られた義手。外見や人つぼさより、デバイスのテクノロジーを組み込むことを優先したらしい。

動きはまだぎこちなくまともに動く気はしないけど。これから世話になる予定の腕だ。

……そして、預金通帳の残高が三桁になった理由。

何でも使っている素材がかなり特殊なもので、こちらの世界では手に入らない合金や、パーツを裏ルートや特注で用意したため普通のものの十倍以上の材料費がかかったらしい。まあ、試作品でデーターやら使用感覚やらを還元する条件で支払いは材料費だけでいいし、メンテもただだし、改良も随時行われるらしいが……

何故材料費が三千万もいく？

数年は借金返済のために頑張らないと……

俺はそう思うと軽いため息をついた。

はやてと過ごす時間がまた減るなあ。できる限りは一緒にいたいけど、難しいかな？

まあ、どっちにしてもこの件が片付かない限りどうしようもないか……

そんなことを考えていたら、アラームが鳴り響く。

「敵襲?...なわけないか。なら...ジェムシード絶賛暴走中かな?」

俺はベットから立ち上がり、艦橋へむかった。

「なんともまあむちゃを.....」

俺が艦橋につくとリンディさんが呆れたように呟いていた。

「確かにあれは彼女個人で出せる魔力を明らかに越えている。このままなら確実に自滅しますね。」

クロノが淡々と事実を話す。

確かに彼女一人で、結界を張り、ジェムシードを起動させるために海全体に魔力流を流し込む。彼女の変換資質により効率よく拡散させたとしても、消費した魔力は一般的な一流魔導士のそれを上回っているだろう。多分飛んでいるので精一杯のはずだ。

こんな終わり方は認めたくないな。とはいえここで行くべきは俺ではない。

「フエイトちゃん。」

なのはが艦橋に慌ててやってきた。

「あの、私すぐに出ます。」

「その必要はない。」

なのはの純粋な言葉にクロノは否定の言葉を返す。
全く空気を読む気がないな……

俺は軽いため息をつく。それにクロノは顔をしかめるが、言葉を続けた。

「どうせ今に自滅する。例え、万が一があつたとしても、弱つたところをまとめて叩けばいい。捕獲の準備を」

戦略的にはそれが一番だろうけど、こちらの目的には関係ないな。

「ごめんなさいね。残酷に見えるかもしれないけど、私たちは常に最善の選択をしないとイケないの……」

リンディさんが言い訳のようなことをなのはに話す。

「でも……ほっとけないんです。あのこはひとりぼっちなの。一人ぼっちの寂しさは私少しだけ分かるから……」

なのははそれを受け入れられない。というより、目的が違うから、そんなこといってもなあ……

「なのは、行くといい。おまえの気持ちをぶつけてこい。」

恭也さんがなのはの頭を左手で撫でながら言った。その右手には待機状態のシャルティエが握られている。

「お兄ちゃん……」

なのはの表情がかなり遠慮気味だ。

「僕がゲートを開くよ。」

「ユーノ君も」

「なのはが困ってるんなら、僕も力になりたい。僕が困ってたときに助けてくれたなのはのように……」

なのははまだ踏ん切りがつかないみたいだ。

「友達になりたいんだろう、一発ドカンとぶつかってこい！」

俺はなのはの背中を叩く。

「そうだね。」

なのはは顔をあげる。その表情には迷いが微塵も感じられず、強固な決意がのぞかれる。

「高町なのは。命令系から離脱して、出ます。」

なのはがユーノが作ったゲートに入り込んだ。

「俺も行くかな。」

「さて、行ってどうする？魔力ランクCの陸戦魔導士が！」

俺がカツコつけていこうとしたら、クロノが言ってきた。

「「「……」」」

気まずい沈黙があたりに流れた。

なんというか、格好が付かないな……

画面を見ると、なのはがフェイトに魔力を分けていた。

「……ユーノ、クロノ。アシスト頼む。」

俺は苦笑を浮かべながら二人に頼んだ。

実際に俺も恭也さんも空が飛べないしな。俺にいたっては、まともに遠距離攻撃もできないし……

「当然」

「そうだな。こんな状況になってしまったらなのはを助けられないわけにもいかないしな。」

「そうね、2人に出てもらおうかしら。」

2人の言葉を聞いて、リンディさんも指示を出した。

「「はい」」

二人はそのまま先ほどユーノが作ったゲートに入った。

あっ、封印二人でやっちゃってる。

いや、おかしいだろ。なのはが同時展開した、封印術式で3つ。フェイトが広域化された封印術式で封印とか……

「ジエムシード六個の封印を確認しました。」

エイミーが「はつきりと告げた。その表情には苦笑が浮かんでいた。

「なんてデタラメな（主になのは）……」

リンディさんが呆然と言った。

彼の宝石翁が創ったデバイスだ理論上は出来ても全くおかしくない。風の噂で聞いた愉快型魔術礼装同様に……

「友達になりたいんだ。」

魔導士組が茫然としていたなかなのはがフェイトに言っていた。

クロノがいち早くなのはショックから復帰してジエムシードを確保しようとしたとき、クロノに紫電が襲いかかる。

『母さん？』

紫電をみて、フェイトが驚いたように呟いた。ちょっとビビってるっばい。

「多分、空気読まない行動に出ようとしたペナルティみたいなものだから気にしなくてもいいぞ。」

一応俺は伝えておこう。とりあえず大ざっぱには社長経由で話

は聞いているしな。

『そつよ、フェイト。』

通信が割り込んできた。その画面にはかなりギリギリなどっかのボスキャラのような格好をした女性の姿が映し出された。

『母さん!?!』

フェイトがかなり驚愕している。

『実はジェムシード九つじゃあ足りないのよ。』

ため息混じりにボスキャラが言った。

『後逆探知しても構わないけどここに来て通信が終わったらいなくなるから意味ないわよ。』

ついでに釘をさされた。

『……プレシア・テストロッサ。』

クロノが呟いた。

『ほう、よくわかったわね。』

プレシアが愉快そうに笑みを浮かべた。

『当人が……だったら一つ言っておきたいことがある。』

『何かしら？』

『4×オになってその格好はどうかと……』

紫電がクロノにおちる。

『フォトンランサー』

『ダイバインバスター』

『シユート』

ついでになのはとフェイトの一撃がクロノを襲った。

クロノさっきの発言はないなあ。

「自業自得ね」

「二人ともよくやった。」

誰一人としてクロノを擁護する人はいなかった。ざまあ。

クロノが海に落ちたのを確認して、プレシアは咳払いした。

『きつとすべての始まりはジェムシード……だから、かけよう、お互いの持つてる全部のジェムシードを。』

なのははつづける

『それからだよ、全部それから……私たちのすべては、まだ始まってない。だから、本当の自分を始めるために……やるう、最初で最後の全力全壊の勝負を……』

そう言っつて、なのははデバイスを掲げた。

『三日後の午前6時……場所はここで』

そう言っつて、ジエムシードを3つ回収した。その瞳には強い意志を感じられる。

『うん！』

フェイトも同様にジエムシードを確保した。

2人の少女は立ち去る。ユーノはなのはとともに帰還した。

クロノは翌日自力で帰ってきた。

第十話 ジェムシード封印！（後書き）

刀夜「ったく、てめえは……」

天宮「更新遅れて大変申し訳ありません。」

刀夜「キンクリして、地の文少ないとかダメ作者すぎるぞ。……更新だっただいぶというかかなり遅れてるしよあ。一回なのはOH ANASHIしてもらった方がいいんじゃないかねえのか？」

天宮「魔王のOH ANASHI怖いよ。」

実はこの時点で全力全壊時、strickersのスペック越えてるのよ。」

刀夜「だったな、第二魔法適用されるんだっけ？スターライトブレイカー」

天宮「……乖離剣に打ち勝てる。…二秒チャージで」

刀夜「フェイトにとってはトラウマもんだな。」

トラウマと言うとフェイトがぼっちなんだよなあ……」

天宮「因みに、プレシアのここにも帰れないから、コンビ二弁当食べて数日間一人で生活を……」

刀夜「カーネージ・シザース！」

天宮「わあああ、いきなり大技って！」

刀夜「平然と、相殺とってる癖に……フェイトの扱い酷すぎるぞ、なのはも、クロノは……まあ、当然か。」

天宮「クロノは仕方ない。あと、原作で事故を起こしたのが26年前ってなつてたのに驚いたよ。また、設定を変えないと……アリシアって生きてたら30すぎ、フェイトぐらいの娘がいてもおかしくない気がする……ミッドチルダなら……」

刀夜「確かに……クロノは19で子供ができたんじゃないっけ？」

天宮「そうよね、因みにプレシアの少女時代を題材にした作品も書く予定なのよね……」

刀夜「そのためにも早く更新しろよ。」

天宮「頑張ります。」

それでは次回予告。

それはある平凡な小学三年生に訪れた出来事。手にしたのは魔法の力。そして、彼女は孤独な少女と出会う、互いに孤独だった二人の『始まり』のための最初で最後の本気の勝負が今始まる。

次回魔砲少女リリカルなのは『始まりの魔砲……オーバーキルは基本です。』

刀夜「なんかいろいろ酷すぎる。もしかして乖離剣クラスのスターライトブレイカーたたき込む気か……フェイト、大丈夫かな？」

天宮「大丈夫」

刀夜「ならいいけど……」

天宮「もつと酷いことになるから……」

刀夜「鬼だ鬼がいる……」

天宮「更新は不定期週に一回以上更新します」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7077x/>

魔砲少女リリカルなのは Gear of Night

2011年11月29日12時47分発行